大光寺城跡の歴史景観復元について

齋藤　正

１　はじめに

開発等により失われた過去の景観を復元する方法には、文献史料を利用する方法、発掘調査で検出された遺構からの検討がある。しかし、すべての地域に文献史料が残っているわけではく、むしろ残っている方が少ないことがほとんどである。発掘調査による景観復元も、面的に限りがあり完全であるとはいえないのが現状である。これらの方法の他に地籍図、地形図、絵図を使って景観を復元する歴史地理学的方法がある。

大光寺城は、１４世紀から津軽地方の中世史に姿を現し、１６世紀には石川城（弘前市）と共に南部氏の津軽地方支配の拠点であった城跡である。平賀町教育委員会による発掘調査により、城跡が機能していた時期、城内での生活様式など解明されている状況である。しかし、景観については、ほとんど明らかにされていない状態である。

今回は、絵図、地籍図等から戦国時代に南部氏の津軽地方支配の一端を担った大光寺城の景観について紹介していく事にする。

２　位　置（図１）

大光寺城は、青森県南津軽郡平賀町大光寺字三村井に所在し、平賀町の中心部から北西１㎞に位置する。中世には、東方に浪岡方面に通じる乳井通、南西に大鰐・碇ヶ関を経由して鹿角方面に通じる羽州街道と交通の要衝に立地していた。城跡は標高約３８ｍの微高地にあり周囲の水田とは比高差約２～３メートルの平城である。西側を流れる六羽川を天然の堀にしている。

城跡の所在する大光寺地区は、宅地造成や道路建設といった開発により景観が急激に変貌している地区であり、城跡は宅地化が進み、旧状を知ることは困難になりつつある。

３　歴　史

元弘４年（１３３４）正月１０日沙弥道為軍忠状（註１）に「大光寺楯」と記載されていることに始まる。暦応２年（１３３９）５月２０日曾我貞光申状（註２）に南部氏、小笠原氏、倉光氏の攻撃により「大光寺外楯打落之処」の記述がみられる。１４世紀前半には大光寺に城館が存在したと思われる。なお、曾我貞光は鎌倉時代に津軽入りした曾我氏の子孫であり、その本拠地は岩楯・大光寺であった。その後、１４世紀後半に曾我氏は南部氏により攻め滅ぼされる。

１６世紀に奥州藤原氏滅亡後、奥州総奉行となった葛西三郎清重の子孫と言われる葛西頼清が大光寺城主なる。文亀２年（１５０２）（註３）と天文２年（１５３３）（註４）に南部氏に討たれた記述がみられる。年代に差があるが大光寺城が南部氏の攻撃を受け、支配下に置かれたことは確かであろう。

天文１５年（１５４６）に北畠氏により編纂された『津軽郡中名字』（註５）には

「(略) 鼻和郡三千八百町ハ大浦ノ屋形南部信州源盛信ト申也、平賀郡二千八百町ハ大光寺南部遠州源政行ト申也、田舎郡二千八百町奥法郡二千余町沼深保内一千貫ハ伊勢国司浪岡御所源具永卿也(略)」とある。

記述からは鼻和郡大浦城に大浦盛信、田舎郡浪岡御所（浪岡城）に北畠具永、平賀郡大光寺城に南

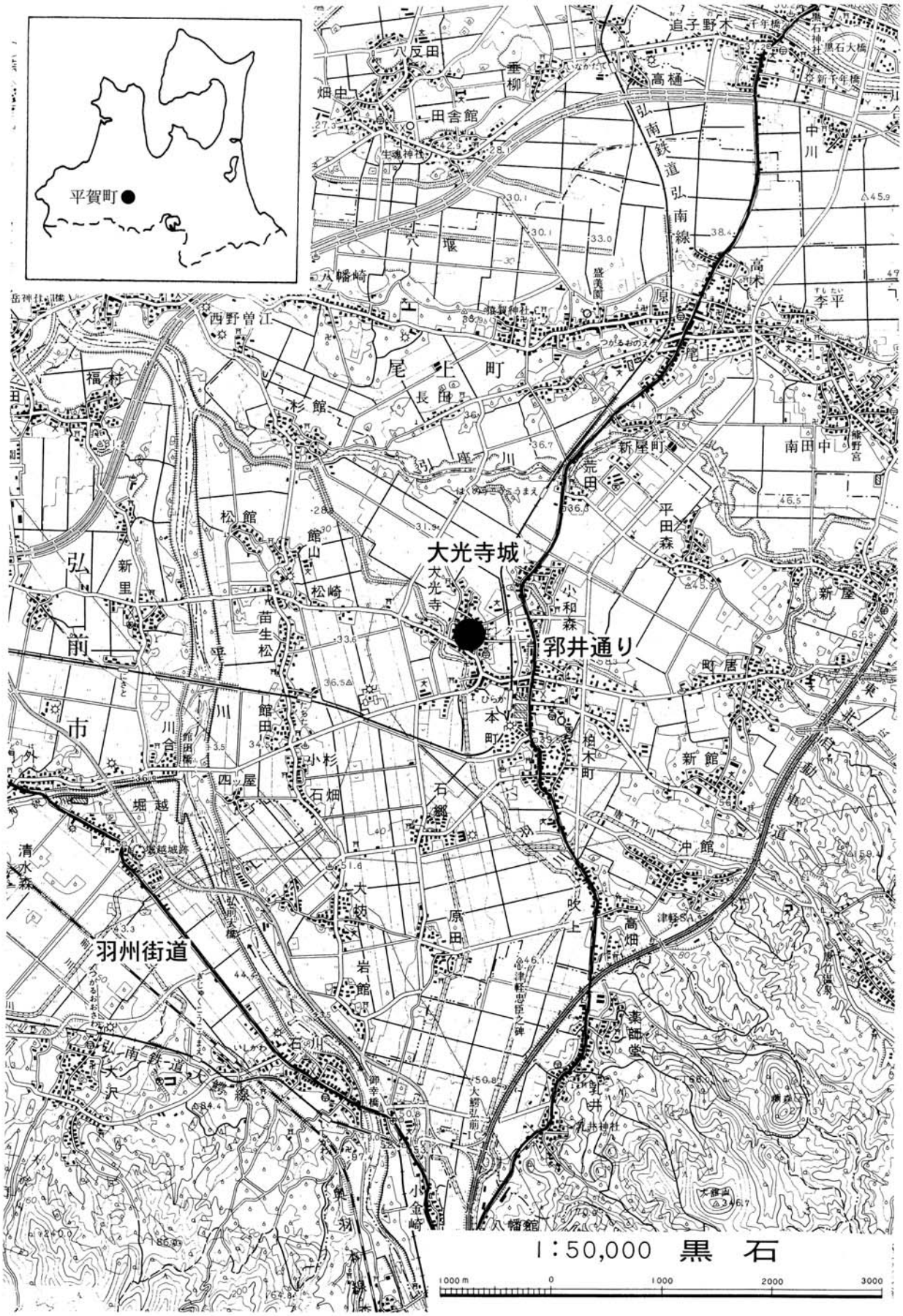


図1　大光寺城位置図

部政行が居城していたことを示して、津軽地方が３郡に分かれ支配されていたことが窺える。

政行が大光寺城に居城した後は、南部氏一族、或いは家老とも言われる滝本播磨守重行が城主となる。天正３年と４年（１５７５～１５７６）の二度にわたり大浦為信に攻められて大光寺城は落城し、滝本播磨守重行は南部に逃れた（註６）。

落城した大光寺城は、天正10年頃、南部氏に奪われた模様である（註７）が再び大浦氏の支配下となり慶長４年（１５９９）為信の娘婿、津軽左馬之助建広が城主となる（註８）が、慶長１５年（１６１０）弘前城築城に伴い、取り壊され廃城となる（註９）。

４　大光寺城の景観復元

大光寺城の景観復元には、地形、地名と次の諸資料から合わせて行った。

①地籍図

②弘前広域都市計画図（平賀町）平成９年修正

③天和４年大光寺村書上絵図・本町村書上絵図（註10）

④津軽諸城の研究（註11）

このうち、①の地籍図については明治時代の地租改正法に基づく地籍図を入手出来なかったために近年の地籍図（註12）を使用せざるを得なかったことを断っておきたい。これから水田等を省いて作成したものが図３である。③の天和の絵図は近世の絵図ではあるが村名、道路、用水堰、寺社等が記載されており、文献史料の乏しい県内の中世を知るうえで大きな手がかりとなる。

（１）城館の構造

大光寺城跡は『津軽諸城の研究』において北郭・二ノ郭（主郭）・一ノ郭・袖郭の４郭で構成されていたとされている。しかし、沼館氏が踏査を行った終戦当時ですら、郭内には民家が建ち並び、城跡を巡る堀は殆ど埋められ、一ノ郭と二ノ郭の間、二ノ郭と北郭の間の堀跡も埋め立られ道路となるなど遺構等はほとんど確認出来ない状態にあった。現在、当時より開発が進んでいることから、４郭及び堀等の遺構を知ることはさらに困難な状況である。

しかし、図２から城跡を詳細に観察すると、一ノ郭と二ノ郭の間の道路から城南、城西を通り二ノ郭と北郭の間の道路にかけて、畑地や果樹園となり、住宅地より約２メートルから４メートル低く巡っている所が確認できる。図３で見ると地割が異なっているのが読みとれ、城跡を巡る堀跡と考えられる。第３図では、一ノ郭と二ノ郭の間の道路北側にも異なった地割が認めれることから堀跡と考えられる。堀跡と考えられるこの地割は途中で途切れるが、さらに延びて先ほどの地割と結びつき城跡を四周する堀の地割を呈するものと思われる。

一ノ郭と二ノ郭の間、二ノ郭と北郭の間の堀跡は道路の下にあり、図３からも明らかではない。しかし、発掘調査において二ノ郭の南北にある２つの道路付近から堀跡が検出されたことから道路が堀跡であったことが確認されている（註13）。

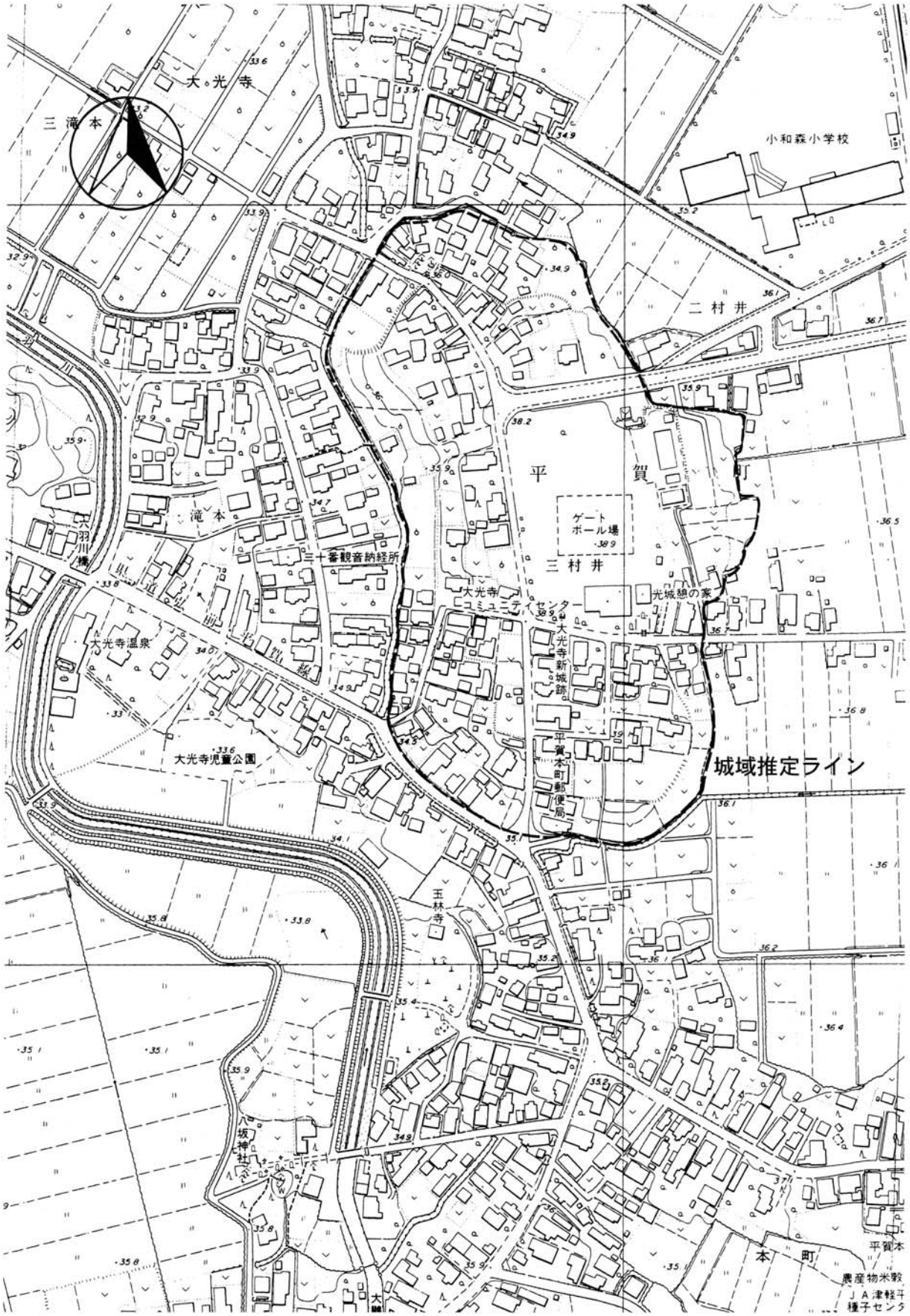


図２　大光寺城の推定範囲

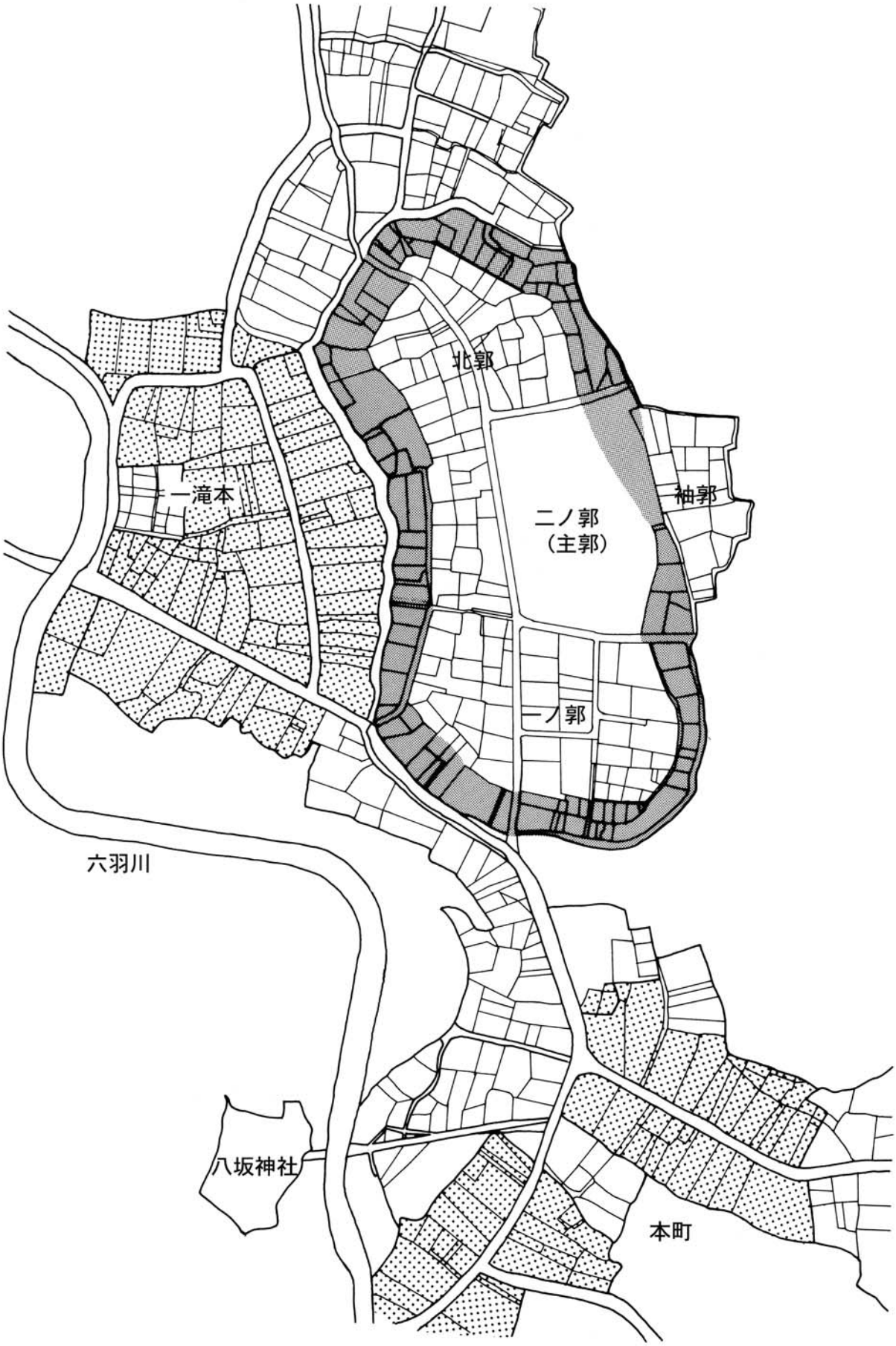
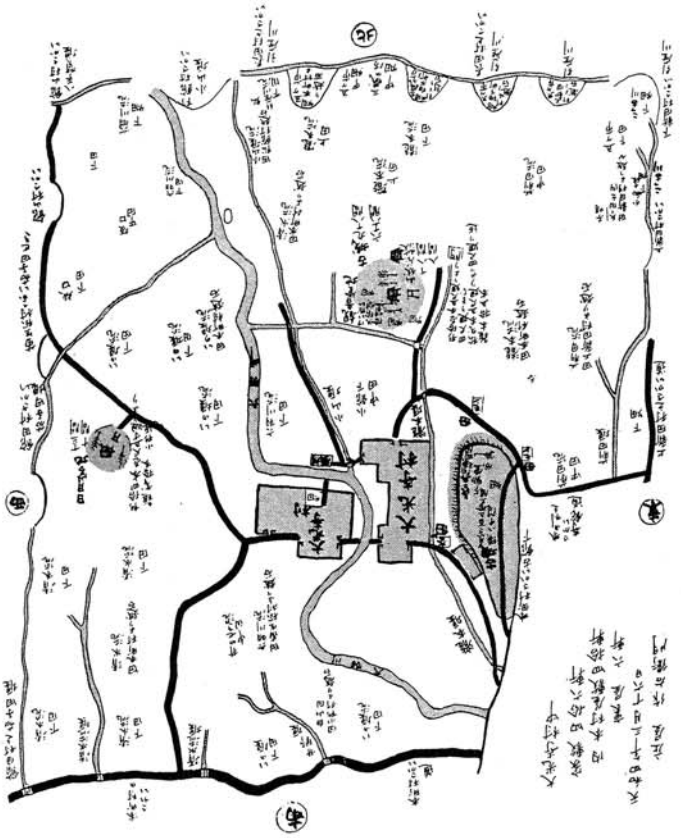
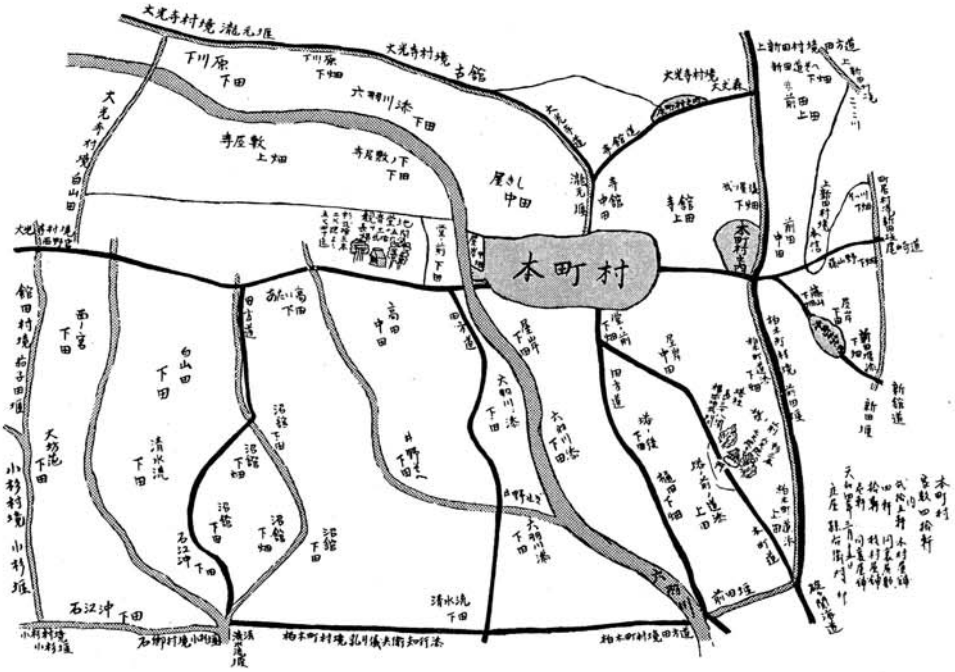


図3　大光寺城城下町推定復元図



大光寺村書上絵図



本町村書上絵図

図４　天和４年の絵図（平賀町誌上巻より転載）

（２）大光寺城周辺の景観

大光寺城は『津軽郡中名字』にあるように南部氏の平賀郡支配の拠点であった。従って、町場（城下町）が存在したと考えられる。『津軽諸城の研究』にも「侍屋敷は城西で、（略）本町は城下町である。」と記されているので、復元してみることにする。

城跡の西側には用水堰を隔て「滝本」と思われる「一滝本」の小字名がある。図３から分かるように「一滝本」の中を一巡りする道沿いには、大小の「短冊型地割」がびっしり見られる。「短冊型地割」は中世の町場に見られることから、中世からのものだったとみて間違いないと思われる。滝本は大浦為信に攻められた際の城主滝本氏に由来していると考えられ、一族・直属家臣団階級の人間が生活していた町場と思われる。

「本町」の小字名は城跡の南側にある。滝本から続く道が南東・南西の二手に分かれた道沿いに「短冊型地割」が２カ所見られ、町場が存在したと考えて間違いないと思う。

天和４年（１６８４）の大光寺村書上絵図（図４）には「古城」（大光寺城跡）の西側に「大光寺村」（一滝本）の集落があり、道が集落内を通って北・南東・西の３方向に延びている状況が描かれている。本町村書上絵図（図４）からは「本町村」（本町）の集落があり、大光寺道を含めて４方向から道が通っているのが見て取れる。２つの絵図に描かれた集落や道の様子は図３に記載されている短冊型地割・道とほとんど変わらずに一致する。大光寺城落城後、津軽氏の支配により整備が行われた可能性もあるが、基本的には、津軽氏支配以前に成立していたと考えて間違いないであろう。

以上のように、大光寺城は、城の西側（一滝本）には城・直属家臣団居住区、南側（本町）に町場を持ち、城・直属家臣団居住区と町場が並立する（註14）戦国期城下町の姿を持っていたことが考えられる。

５　まとめ

南部氏の津軽支配の拠点であった大光寺城は、「短冊型地割」の町並みを持った戦国城下町であったことが窺える。『津軽郡中名字』に記述されているように平賀郡の拠点としての位置付けは可能であると推察される。

しかし、景観の復元というには、明治時代の地籍図を使用していない点などから不十分であった感じは否めない。今後は平賀町教育委員会による発掘調査や地籍図による町場の範囲の確認、絵図から古道の検討、寺社配置などを厳密に行い、広く解明していくことが今後の課題となるであろう。

筆者の勉強不足のため、多くの誤解等が見られるものと思う。先学諸氏のご教示を賜りたいと思う次第である。

なお、本稿は平成９年度國學院大學に提出した卒業論文の一部を修正したものである。記すにあたり、千々和　到先生、浪岡町史編纂室の工藤清泰氏には様々な形でご指導いただいた。また、平賀町郷土資料館の小笠原　豊氏、渡部　学氏には資料提供や現地踏査で多大なお力添えをいただいた。末筆ながら厚くお礼申し上げる次第です。

註

（1）弘前市　1995「南部家文書」『新編弘前市史資料編1（古代・中世編）』630（文書番号）
（2）弘前市　1995「南部家文書」『新編弘前市史資料編1（古代・中世編）』680
（3）弘前市　1995「館越日記」『新編弘前市史資料編1（古代・中世編）』875他
（4）弘前市　1995「前代歴譜」『新編弘前市史資料編1（古代・中世編）』898他
（5）弘前市　1995「津軽郡中名字」『新編弘前市史資料編1（古代・中世編）』915
（6）弘前市　1995「永禄日記」『新編弘前市史資料編1（古代・中世編）』1001他
（7）弘前市　1995「聞老遺事」『新編弘前市史資料編1（古代・中世編）』1042
（8）弘前市　1996「津軽一統志」『新編弘前市史資料編2（近世編1）』73他
（9）弘前市　1996「津軽一統志」『新編弘前市史資料編2（近世編1）』283他
(10) 平賀町　1985『平賀町誌』上巻
(11) 沼館愛三　1977　『津軽諸城の研究』
(12) 地籍図には、昭和63年に城跡の北東に移転した小和森小学校の地割が記載されていないことから、この地籍図は昭和63年以前に作成されたと推測される。
(13) 平賀町教育委員会　1989『大光寺新城跡遺跡発掘調査　第1次調査』
　　1990『大光寺新城跡遺跡発掘調査　第2次調査』
(14) 市村高男　1985「中世後期における都市と権力」『歴史学研究』547号